

# (エッセイ) 文教大学越谷図書館蔵の美術作品について

藤倉 恵一

はじめに

2003年9月現在、文教大学越谷図書館には4点の美術作品がある。

毎年の新入生図書館利用ガイダンスをはじめ、高校生やその保護者の大学見学、あるいは図書館員の会合等で越谷図書館を初めて訪れた者の多くは、エントランス上の像をなんとなく見上げ、階段の途中にある蛇口状の物体に首を傾げ、ブラウジングルームの壁面はただ風景の一部として見過ごしてしまう。

館内の各所を彩っているこれらは、いずれも教育学部美術専修の教員より図書館に贈られた作品たちである。

図書館正面エントランスの上を飾る「明日の空へ」(峯田義郎作)に始まり、地下1階のブラウジングルームの壁面には黒と白の「予兆空間」(里中英人作)を見ることができる。地下1階より2階へと続く階段の途中には6つの「蛇口シリーズ」(里中英人作)が並び、2階ブラウジングルームの壁面には「ナザレの朝」(川村浩章作)が架けられている。

これまでこれらの諸作品について、旧「図書館だより」をはじめ紹介される機会は何度かあったが、解説や由来などがまとまって紹介されることはなかった。図書館だよりには「明日の空へ」「予兆空間」「ナザレの朝」についてそれぞれ作者による解説が寄せられているが、いずれも作品そのものというよりもその背景に主眼が置かれたものであり、また、「蛇口シリーズ」については、図書館だよりで紹介されたのは作者である里中英人が交通事故により急逝された後のことである。

本稿では、既に越谷図書館の一部となっているこれらの美術品に光をあて、多少なりとも解説や由来の整理を試みたい。

なお、文中敬称は省略させていただく。

## 1. 明日の空へ

「明日の空へ」(峯田義郎作・1981年)は、図書館の正面エントランス上(2階ブラウジングルームの外壁にあたる)に据えられた青銅製の彫刻であり、越谷図書館のシンボリックな存在である。三体の青年(男性・女性・男性)像と七羽の鳩の像からなり、いずれも壁面から支柱で中空に固定されている。青年像の正確な大きさは資料がなく不明だが、ほぼ等身大か、それよりやや大きいくらいである。いずれの像も直立し、首は正面よりやや上を向いていて遠くを見つめている。六羽の鳩は右から左へ一直線に並んで羽ばたいているが、いちばん左の一羽だけは少し離れたところで大きく翼を広げまっすぐに空を目指し、青年たちもまた遠くの空を見つめていることが容易に想像できる。図書館だよりに掲



載された峯田の寄稿<sup>2)</sup>によると、当初は浮き彫りで計画されていたが、仰角の視点を考慮して丸彫りに変更されたという。実際、「明日の空へ」を正面からはっきりと写真に撮影することは困難であり、どうしても、正面全景を撮ってフレームに収めるか、エントランス近くからの仰角のアン



ングルになる（下写真参照）。前述の図書館だよりや開館当時の図書館紹介パンフレットでは正面から撮影した写真が掲載されているが（2つの資料は同一の写真を使用している）、これは建築当時、図書館の周囲に障害物が少なかったことにより撮影が比較的容易であったと聞く。現在同じアングルで撮影しようと試みる場合はおそらく、図書館正面に足場を組んでやる必要があるだろう。もし、「明日の空へ」が浮き彫りであったなら、図書館から少し離れたところから像を眺めなくてはいけなくなる。実際の「明日の空へ」は

中空に固定され、見る角度ごとにそれぞれ違った趣を見せている。

前述したとおり越谷図書館のシンボリック的存在であり、図書館を訪れる者は少なくとも一度以上目にするようになる。利用者の声も、像のテーマともいべき「青春」を感じたというもの<sup>2)</sup>から「足の先が尖っていてこわい」<sup>3)</sup>という実にストレートな意見まで図書館だよりに見られるが、この図書館のシンボルにはそれぞれに思うことがあるだろう。

さて、現在の「明日の空へ」だが、開館当時は黄銅色に輝いていた像は緑青や錆により鉄灰色に近くくすんでいる。1997年春に図書館の外壁塗装工事があった際も「明日の空へ」はそのまま置かれた。今後、いちど清掃・洗浄するか、それともさらなる経年に任せ緑青がのるのを待つか、思案のしどころではないだろうか。

## 2. 予兆空間

「予兆空間」（里中英人作・1981年）は前衛彫刻家であった里中の代表作のひとつであり、地下1階ブラウジングルームの2つの壁面いっぱいに広がる陶壁である。大きさは縦2.4×横12m。近づいてみると、縦30×横30cmほどの陶板が、向かって左の黒い壁面には縦7枚×横15枚の105枚、右の白い壁面には縦7枚×横14枚の98枚がそれぞれ並べられている。それぞれの陶板は亀裂によって不規則なモザイク模様を描いており、表面を覆う陶片のひとつひとつは大きさも形状も様々である。これは陶土を塗り固め、その乾燥の過程で発生する「割れ（クラック）」によるものである。クラックのそれぞれは決して意図的なものではなく、里中の意図は「土の呼吸」をいかにして引き出すかというところにあったといわれている。図書館だよりに掲載された里中本人による文章<sup>4)</sup>を引用すると、「極力人為的な作為を抑え、生な土の声を



素直に聞こうとする」というところから始まり、大自然の摂理に耳を傾ける行為であるという。

「予兆空間」におけるクラックもまた、塗り固められた土に時間が与えた無数のクラックである。静寂な空間におけるクラックの構成美——美的秩序から「人間の生への予兆」へと繋がっていく

ものである、と里中はいう。また、越谷図書館の館長補佐である三瓶良男はかつて「予兆空間」の解説を記すとき、「時間と空間が、見つめるものをクラックの狭間にダイナミックに巻き込んでいく」と表現した。また、「巨大な生の奔流が怒涛のように生の岸边を洗う」、とも述べている。

「予兆空間」は開館当時から地下1階ブラウジングルームに設けられており、図書館紹介のパンフレットにも大きく写真が掲載されている。また、国内の前衛陶芸家とその代表作を解説した



「明日の造形をもとめて」<sup>5)</sup>の里中の項目には、2ページにわたって大きく「予兆空間」の写真が掲載されている。

残念ながら近年、特に白い陶板の方の傷みが著しい。ひとつには褪色がある。地下1階ブラウジングルームは館内で唯一喫煙が可能な箇所ということもあり、タバコのヤニがクラックや陶片を蝕んでいるのである。現在は白というより象牙色に近いが、陶板の性質上「水をかけて洗浄すればすむ」というようなものでもない。また、陶片の欠落もあちこちで見られる。これは経年による自然な現象であるが、前述したような里中の制作意図を考えると、欠落したからといって安易に接着剤等で「修復」できるような性質のものではない。里中が故人ということもあり、これらの修復作業については、今後劣化がより深刻になる前に慎重に検討する必要があるだろう。

### 3. 蛇口シリーズ

「蛇口シリーズ」(里中英人作・制作年不詳)は6点からなる水汲場を模した作品群であるが、今回紹介する美術品の中にあってもっとも個性的であり、そしてもっとも謎に包まれている。1点の大きさは正確な記録がないが、およそ幅30×高さ23×奥行28cmほどである。色は茶褐色で一見すると彫刻にも見えるが、いずれも高温焼成された「陶器」であり、重さは見かけほどではない。形状は、半円状の水受けのついた水道の蛇口を模した水汲場で、1点ごとに蛇口の角度が異なり、そこから滴り落ちる水滴もまたそれぞれに違った表情を見せている。6つの蛇口が直線状に並んだとき、同じ蛇口をめぐる緩やかな時間の流れを感じ取ることができるだろう。本来、このように一箇所に直線状に並べるのが里中の制作意図であったと聞かすが、現在は残念ながら場所の関係で、B階段上に2階に2つ、2階と1階の間に2つ、1階と地下1階の間に2つと、計6点が分散して置かれている。



制作年については記録が不明なので明らかでないが、里中の代表作のひとつである「SERIES: POLLUTION ALLERGY (シリーズ・公害アレルギー)」(京都国立近代美術館蔵・1971年)がこの「蛇口シリーズ」と非常に似通った形状を示していることから、これと同時期か、その後に制作されたものと推定される。余談であるが、この「シリーズ・公害アレルギー」は1971年10～12月の京都国立近代美術館特別展「現代の陶芸—アメリカ・カナダ・メキシコと日本—」に展示されたものであり<sup>6)</sup>、1981年の「美術手帖」480号に掲載された里中の記事<sup>7)</sup>に写真や制作上の手法・意図が掲載されている。一方、1976年の里中の著書<sup>8)</sup>に掲載されている写真は、同じ題

を冠した同じモチーフの作品（制作も同年である）でありながら、あきらかに形状が異なる。あるいは、「蛇口シリーズ」は「シリーズ・公害アレルギー」制作の過程で誕生したバリエーションなのかもしれない。里中については倉石による考察<sup>9)</sup>をはじめいくつかの文献が存在するので、今後これらをもとに調査すれば、何か判明するかもしれない。

さて、図書館の「蛇口シリーズ」に話を戻すが、この作品が図書館に寄贈されたのは1989年に里中が交通事故により急逝された後のことであったという（寄贈年月日についての記録は残されていない）。当初は前述の「予兆空間」と並んで地下1階ブラウジングルームに置かれていたが、その後、ブラウジングルーム座席配置等の事情で現在のB階段に移設された。移設の時期についても正確な記録はないが、新館10周年記念号にあたる図書館だよりNo.39に「蛇口シリーズ」の写真が掲載された当時（1991年12月）はまだブラウジングルームにあったようである。

現状の「蛇口シリーズ」は寄贈当時から専用の展示ケースによって保護されているため、ほぼ完全な状態を保っている。本体にはひびが入っている箇所があるが、これは製作過程で発生したものであり、制作意図の一環であると思われる。展示・保存についてあえて課題を挙げるとすれば、里中の意図を尊重し同一線上に配置することだが、これは館内レイアウトの関係上容易には実現しない。今後の館内レイアウト計画の中で検討すべき課題だろう。

#### 4. ナザレの朝

「ナザレの朝」（川村浩章画・1981年）は、2階ブラウジングルームの壁に架けられた油彩画で、大きさはF100号である（縦160×横130cm）。

1981年4月の第55回国展に出品された後に図書館に寄贈されたものである<sup>10)</sup>。寄贈時期の詳細は定かではないが、翌年4月発行の図書館だよりに川村の寄稿<sup>11)</sup>があることを考えると、1981年のうちのことではないかと推測される。

この年代の川村の作品にはヨーロッパを題材にしたものが多く、この「ナザレの朝」も、ポルトガル中西部、レイリア県の大西洋沿岸にある漁師町ナザレ（Nazaré）を描いたものである。ポルトガルの旅行案内等を見ると、白い家並に橙色の屋根が特徴的であり、その中でもナザレという街の風景は空の蒼、海の藍、屋根の橙、壁の白というコントラストが非常に印象的である。



さて、前述の図書館だよりへの川村の寄稿は、「ナザレの朝」そのものの解説というよりもむしろポルトからナザレに至るまでの紀行文であるのだが、その中で川村はナザレの朝の風景について、「白い壁と、赤（オレンジパーミリオン）い屋根の重畳、すばらしいの一言につきる」と述べている。その川村の印象を受け「ナザレの朝」もまた、白い壁とオレンジの屋根が非常に美しく描かれている。川村の文章と、ナザレの地図から察するに手前はプライア地区（A Praia）であり、プライアの家並の向こうにあるのはシティオ地区（O Sítio）の丘であろう。その上にはまた街が描かれている。ここにはノッサ・セニョーラ・ダ・ナザレ教会やメモリア礼拝堂といったナザレの名所がある。

「ナザレの朝」は川村が1989年に退職した後も、1999年10月に一度、川村自身の手で修復作業が行われており、現在はほぼ完全な状態を保っている。

おわりに

さて、本稿執筆の動機であるが、発端は美術研究室所蔵の美術品のいくつかを図書館で展示したいという美術研究室からの申し出による。これは2003年秋から始まった企画であるが、それに伴い、元来図書館に所蔵されている4点の美術作品についても図書館ホームページ上で公開したい、という企画が浮上した<sup>12)</sup>。

ところが、いざこれらについて情報を収集しようとする、意外なほどに情報が少ないことが判明した。より正確には、情報自体は教職員たちの「口伝」として存在しているのだが、冒頭にも記したようにその根拠となる資料がほとんど現存していないのである。

ここまでで解説してきたすべての作品はどれも筆者が着任してきたときには既に図書館にあり、作者の諸先生は既に学校を去られた後であった。であるから、筆者にとってみれば「ここにあるのが当然」という状態であり、筆者が新入生ガイダンスや来館者の見学時に行う解説もすべて古参の職員から聞いた情報に基づいている。それら美術品にまつわる背景のいろいろな「事情」はそれでよいのかもしれないが、解説は最低限でもやはり基準となるものが欲しい。本稿の動機はそういうところにあった。実際、本稿の執筆にあたってブラウジングルームに「予兆空間」の解説を記した三瓶館長補佐をはじめ古参の先輩職員の記憶や記録が大いに助けになった。また、鈴木武右衛門先生・中川素子先生をはじめ美術研究室の方々にもたいへんお世話になった。

本稿の完成でこれらの美術品についての情報をすべて網羅したとは思っていない。本稿は出発点であり、今後はこれらについての情報を収集し整理していきたい。

最後に、本稿は敢えて「エッセイ」と括らせてもらった。本当ならば、年報に掲載されるものであるし、これらの美術品について初めて記されるものであるから、厳密な調査と審美眼に基づく解説そして批評の原稿であるべきだったのだろうが、筆者の力量では遠く及ばない。

なにしろ筆者は美術の専門家ではなく、ただの「ドシロウト」である。冒頭で「これらの美術品に光をあてる」と書いたが、あまり強い光は美術品にとって大敵である、ということで……。

#### 注・参考文献

- 1) 峯田義郎 “明日の空へ” 『図書館だより』 No.2, 1981.10, p4.
- 2) “新図書館によせて 一利用者からのひとこと” 『図書館だより』 No.3, 1982.1, p2-3.
- 3) “特集：図書館のここがキライ!! 言いたい放題” 『図書館だより』 No.42, 1993.1, p2-3.
- 4) 里中英人 “予兆空間” 『図書館だより』 No.2, 1981.10, p3.
- 5) 鈴木健二編 『明日の造形をもとめて』 (現代日本の陶芸 15) 東京, 講談社, 1985, p.30-35.
- 6) 京都国立近代美術館 (URL <http://www.momak.go.jp/> 参照 2003.9.11)

- 7) 里中英人 “土を焼くことの意味を問う” 『美術手帖』 480, 1981.4, p.191-194.
- 8) 里中英人著 『陶による新しい造形：思考とテクノロジー』 東京, グラフィック社, 1976.
- 9) 倉石文雄 “里中英人の現代陶芸における取り組みとその功績についての考察” 『香川大学教育学部研究報告 第1部』 103, 1998.3, p.17-40.
- 10) 川村浩章著 『川村浩章画集：画業50年を回顧して』 東京, 川村浩章, 1990
- 11) 川村浩章 “ブラウジングルームの絵によせて” 『図書館だより』 No.4, 1982.4, p2.
- 12) 本稿執筆の過程で得られた資料・写真を元に、2003年11月より紹介ページを公開開始した。  
図書館ホームページ (<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/lib/klib/>) のメニューから「文教大学越谷図書館について」→「越谷図書館所蔵の美術作品」をクリックすることで閲覧することができる。また、同じページ内で美術研究室所蔵美術品の展示企画の紹介も行っている。

なお1980年代の越谷図書館については「図書館だより」No.1-60(1981.7~1999.4)のほか、開館当時のパンフレットや年報掲載の年表を参考にした。また、峯田・里中・川村の在職時代について、下記の資料を参考にした。

- ・ 川村浩章著 『スモッグに沈む』 東京, 日本図書刊行会, 2000